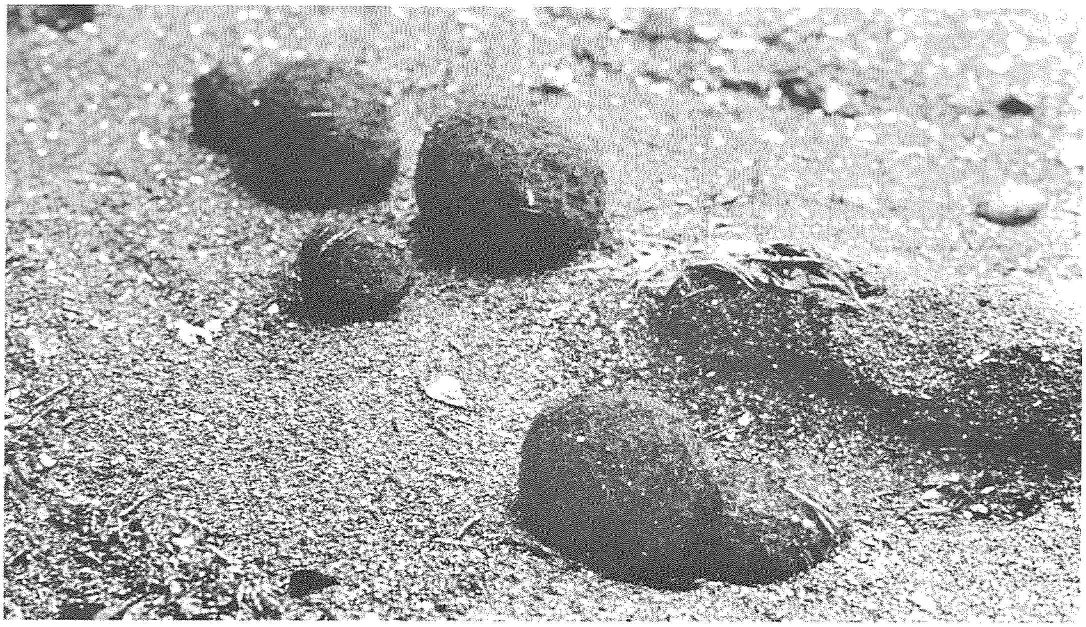
北水研ニュース

No. 19
昭和53年 8 月
水　産　庁
北海道区水産研究所
釧路市桂恋116番地
電話　(0154)91－9136
郵便番号　085



桂恋海岸に打上げられた海産マリモ？ 5 頁参照

随　想

所長　**長谷川　由雄**

余市における半世紀にも及ぶ研究拠点を昨秋道東の漁業基地釧路に移してから10ヶ月の経過をみるに到った。建設の途中を今、振返ってみるとき、いろいろな想いが甦えってくる。移転という提案と、そして実行、正に〝重荷を負うて遠き道を行くが如し〞であることを身をもって実感したことである。9月に職員一同（移転困難者を除いて）秋空の晴れ上った新拠点に引越しをすませ、所の荷物やら職員自身の荷物の整理に馴れない土地で大変な苦労をされた。着任後1ヶ月余りで竣工式を迎え、所内の整理に職員等は不平一ついわず、大いに頑張ってくれたお陰で式と披露宴を盛大に行うことができた。参加の方々からおほめの言葉を頂き、喜ぶ間もなく移転業務で一時中断された研究活動を開始し始めた。丁度 200海里漁業水域問題で北海道をとり巻く漁業情勢がきわめて厳しい時期と出会い、職員一同大変な対応を強いられたが、みんなで力を合わせ何とか乗り切ってきた。

新しい革袋に勤務する古き職員一同は諺とは反対に毎日毎日をいきいきとして研究活動に取り組んでいるのを目の当たりにみて安心したのは、一人私ばかりで

◆ 目　次 ◆

随　想……1 頁
北国で得た印象……2 頁
北水研に赴任して……3 頁
会議情報……3 頁
海産マリモ？打揚げられる……5 頁
北光丸の船籍港釧路に移る……5 頁
昭和53年度船舶運航計画……5 頁
刊行物ニュース……5 頁
北水研日誌……7 頁
人事移動……8 頁
編集後記……8 頁

はないかもしれない。

大変気持のよい秋空のもとでの生活、やがてやってきた冬を迎えたところ、本冬は何10年振りという大雪に見舞られ、構内は2度もブルを入れる始末であり、公宅の方もモータープールでは職員の車が吹き溜りで埋没する状態で、〝釧路は殆ど雪が降らないから除雪道具なんか不用であるといった所長は嘘をいった〟と職員にいわれる始末であった。又、地元からは北水研が余市から大雪をもって来たといわれ散々であったが、早朝の気温の方はマイナス2桁でも、そんな時刻に外を歩いているわけはないので心配は全くなく、その様な時刻にはぬくぬくとアパートで寝入っている頃である。日本で最も早く陽が昇る頃の時期になると気温も1桁台にまで昇り、余市と比べて全く苦にならず、あっという間に春を迎えてしまった。春は霧のシーズンで5、6、7月が最盛期と聞いていたが、今年の6月は大変よい天気続きで飛行機の欠航も殆どなく釧路っ子を驚かせた天候異変の一つであった。ところが、7月に入るや連日、濃霧の連続で釧路の本領を発揮、1日6便もある東京直行便が全便欠航という日も珍らしくなく、東京の会議には航空券と特急券の両方を仕度し、出発当日の天候をみて空港と駅との間をウロウロする日が続くうちに、霧の晴れ間には又、10年振りといった猛暑に見舞われ夏では最高22～23℃になると、従来釧路っ子はフウフウいったものと聞いていたが、最高31℃(庁舎付近)にまでなり、こんな日が数日も続いたことで、これも北水研が余市からもってきたのかと水試の人達からいわれ散々であった。又、珍らしい話のついでにもう一つ紹介する。

7月はじめには、27年振りに桂恋前浜に〝海産マリモ〟?が多数打揚げされ、報導機関や学校からの問合せが殺到したりして、とにかくこの10ヶ月間、私達の周辺には森羅万象の異変続きであった。

さらに、予想していたとはいえ、現在、我国で最も新しくできた、そして施設の最も良く充実した国の研究機関ということで、見学者、来訪者が春から連日のようにあり、これにはうれしい悲鳴をあげているところである。これはしばらく続くであろう。

これから第2回目の秋空はどんなふうになってゆくか楽しみでもある。

北国で得た印象

大迫正尚

遠水研から北水研へ転勤したことが私の今迄の諸々の事の整理をさせ、同時に新しい経験をもたらした。

新しい経験とその第一印象は案外長く心に残るものもあるが、一方ではそこでの生活が繰り返されることによって意識の中に埋没するか、または美化されるものもあろう。しかし、何かしら今度の第一印象には、私にとって貴重なものが含まれている感じがするので何か雑然としたものでかつ主観的なままであるが、書き残したいと思い筆を取った。

私もそうであるが、一般的に北国の春が短いと感じられている。それは視覚的に、または草花の開花時期や新緑である時期の長・短がその基準になっているように思う。実際、釧路の6月は、その一ヶ月の間に急速に変化し、正に寸刻で冬枯から初夏の風景へと移っていく。そしてこの百花繚乱という状態は北国の初夏の限りない自然の躍動の美しさを感じさせるには十分である。しかし、日が長くなり、日中いくらか雪がとけるがまだ真冬日(最高気温がマイナスを示す日)もある3月中頃に除雪をしたが、雪(その下側は板のような氷となっていた)と土との間が、約10糎ぐらいの空洞となっていて、その下の黒く湿った土にはすでに新しい芽が息づいていた。私はその状態をしばらく眺めていたが、何故か北国の植物達の春の盛りを肌全体に感じた。北国の植物達の春は、すでに雪の下で続けられていたのだという思いが体を突き抜けた。

私が勤めた最初の水研は北水研だったので、再び古巣に帰ったような気持だったが、新しい職場に感じるあるよそよそしさは免れず、多少孤独感があった。やはりその職場内でのある位置を得るには、それなりの時間の経過が必要なのであろう。そんな時期に私の新しい対象となったイカ類及びサバ・イワシの調査のため乗船したことは、仲間意識を作るきっかけとなったようである。

乗船はすでに、サケ・マス調査で10数回経験しており、別に新しいことではないが調査の内容は全て初めての経験であった。船上での作業は、イカ釣機が稼動している間、標識放流などをしない限り、サバ釣や灯に集って来るイカ類の稚魚・サンマ・イワシなどの標本をタモですくうことである。私としては初めての経験であり多少興味もあって、結構熱心に——あまりスマートではなかったけれど——タモ採集に従事した。灯の下を通過する色々な生物達をすくうために一心に海面を見つめている時に、単純すぎるかもしれないが、昼間は見ることが困難な海の生物達のそれが全くほんの一端であったにしろ、生活を垣間見ることが出来たと思った。多少粗忽的に思いこんだことによって、私が今まで漠然と感じていた彼等の生活の実態に直接触れ得たようなある感動を覚えた。その実態というのは、サバヤツメイカが跳び上る稚魚——多分サンマと思うが——を追いかけたり、サメが姿をみせると、三三五五集まって来ていたサンマが視界から消えさったり、ハダカイワシ類が体側で螢光を光らせてひょろひょろと泳ぐといったような彼等にとっては日常的な

営みが、私には何かとてつもなく新鮮で貴重なもののように感じられたからである。

この例として上げた２つの事柄は、特別に目新しいことでもなく、変哲のない自然の営みであるのにもかかわらず何故私に強い印象を与えたのであろうか？多分、それがなんの変哲もないことによって逆に、北国の植物や海の生物達がそれぞれの種としての長い歴史を通じて生活を築いてきたという重みの前に自分の矮小さが強く意識されたのだろう。

少くとも、近代における人間は、自分達の生活を豊かにするために、ほとんど無反省といってよいぐらいに自然を破壊し、かつ略奪してきた。現在もまだその傾向が続いているにしろ、一部には反省の動きが見受けられる。だが、その動きも時と場合によっては、全く人間社会の都合だけで、単に人間同志それぞれの理由だけでの争いにしかすぎないことが多い。私にとってのこの新しい経験は自然の構成者である種それぞれが、自分達の環境の中で築いてきた生活を、私達の意識とはかかわりなく営んでいるのだということを強く感じさせた。そして私は、あらためて人間の生活と自然との本当の意味での調和が必要であること、そしてそれを達成するためには、自然の営みを素直に見つめる視点と、発想の転換が必要であると思った。

人それぞれの見方でもって、自分の居住環境に反応するであろう。そして今の私は、さほど強い抵抗感もなく北国の生活に慣れそうな気がしている。釧路の６月の私の知っている野の花といえば、エゾカンゾウ、ヒオオギアヤメなどぐらいであるが、自然の花園の甘い香りの中でカッコーの啼く声を今のところ満喫している。　　　　　（資源部資源第三研究室長）

北水研に赴任して

村　本　　久

この４月、こちらに御世話になる事になって、３ヶ月になりました。

８年振りに内地勤めを了へての帰道ですが、広い本道の事、札幌産の私には、釧路は来る機会の無かった始めての土地であります。それに、過去５回動いた職場は、全て陸にかかわる部門ばかりで、水産や海とは無縁のものでした。

それが文字通り畑違いの水産研究所の禄を食むとあって、そのさま変りに、すっかり慌てたものです。とは言っても、それから今日までの毎日は、慣れぬとは言へ試行錯誤の連続で、何時になれば、さまになるのか甚だ心許ないのですが、自嘲と悔恨を繰り返しながらも、やがては釧路の秋空のように、晴れ上る日の近かろう事を思い、１日１日の積み重ねを大事にしようと考えている昨今であります。　　　　（庶務課長）

会議情報

(1) 昭和53年度200カイリ水域内漁業資源総合調査連絡会議

200カイリ水域内漁業資源調査の北海道における53年度の第１回の会議が、５月24～26日に釧路で開催された。この会議の初日には、北水研が窓口となっている太平洋イカ研究チーム、スケトウダラ・ホッケ研究チーム、および底魚の地域研究チームの組織、運営、ならびに53年度の業務内容が検討された。また25～26日には北海道ブロックの主として53年度の委託調査計画を中心として、それに関連する沿岸重要資源・底魚資源調査や漁海況調査等について検討された。

協議結果の概要を下記に要録する。

Ｉ、魚種別研究チーム、地域研究チーム検討会

日時　５月24日　９時30分～17時

場所　釧路商工会館

参加機関

水産庁研究課、東海、日本海、東北（八戸）、南西（高知）、北海道各水研、千葉、神奈川、愛媛の各県水試、北水試（中央、函館、釧路、網走、稚内）

要録

1、チームの運営は、本調査をベースにする資源量、漁獲許容量の評価のみに限られるものではなく、基盤研究も包括して幅広く総合的に研究推進がはかられることが望ましいが、現段階では時機尚早と判断され、当面は資源評価を目標として運営することを確認した。

2、太平洋のイカの資源評価は漁業の規模からみて、スルメイカとアカイカにしぼられようが、ケンサキイカその他ローカル種については、海区ブロックごとに本事業の諸調査の中で独自にそれらの研究を進め、資源評価のための基盤づくりをする必要がある。

3、太平洋イカの資源評価は、方法論について研究チームとして論議がなされていないので、53年度の評価は窓口水研が資源評価会議に提案し検討してもらうことになろう。

4、スケトウダラとホッケは寒流系魚類のうちでは重要種であるが、研究チームの複雑化をさけるために、両研究チームを解消し、53年度以降は各ブロックの地域研究チームの中で研究を進め、ブロック間にまたがる問題については、寒流系底魚研究の幹事窓口水研（北水研）が調整する（この提案に対し後日研究課から、52年度の研究チームを継承されたいとの申し入れがあった)。

5、地域研究チームにおける魚種の資源評価は、日ソ漁業交渉との関係をも考慮すると、対象種が多くな

るので、北水研と北海道５水試が魚種別系統群別(24系統）に原案作成を分担し、９月下旬釧路で開催される資源評価会議で検討する。

6、太平洋イカの資源評価会議は、第２回イカ漁海況予報の検討も合せて、９月下旬釧路で開催する。

II　北海道ブロック検討会議

日時　５月25日10時～26日12時

場所　北水研会議室

参加機関

研究課、北水研、北水試（中央、函館、釧路、網走、稚内)、北海道水産課、札幌統計情報事務所

要録

1、研究課長から漁獲成績報告書の提出の遅れている北海道に対し、その促進について強い要請があった。これに対し北海道側から事情の説明とその対策が提示され、水産庁もそれを援助する方向で検討することが確認された。

2、漁獲統計業務が53年度から水産統計に移管されることになったことについて研究課が説明し、原票の収集、機械集計方法について札幌統計から説明がなされた。

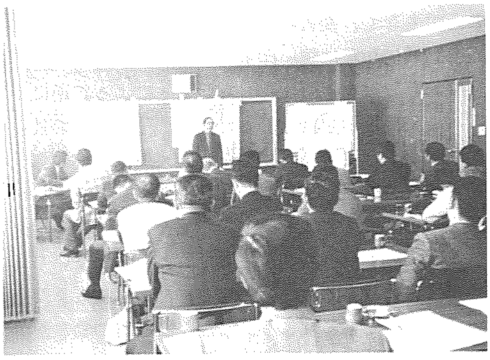
3、北海道から53年度委託事業計画（52年度継統分）について説明があり、その中で特に生物調査対象魚種の魚価が著しく高くなっているものに対する調査方法、および漁業の変化にともなう調査の変更と経費等について論議された。

4、卵・稚仔・魚群分布精密調査計画について北海道各水試から説明があったが、53年度の調査は暫定であることを認め、54年度以降の調査の方向着けについては、今後水研水試双方で十分検討することになった。

5、沿岸重要資源・底魚資源調査委託費について、その調査対象魚種が 200カイリ資源調査の対象種と重複している点をとりあげ、両調査の関係について論議した。水研側から沿重・底魚資源委託調査の位置着けについて２・３の提案がなされたが、水試側から北海道の資源調査は、予算不足のため道予算に国からの補助金、委託費等を合せて総合的に運用しており、200カイリと従来の委託費調査は相互補完的に調査設計されている事情の説明がなされた。

6、その外に、ソ連 200カイリ水域内における日本漁業の漁獲成績報告書のとりあつかい、北転船による資源調査計画、および53年度関係諸会議のスケジュール等について水研、研究課から説明があり、意見交換がなされた。　　　　（新谷久男）

(2) 漁業資源研究会議北日本底魚部会



昭和52年度ＧＳＫ北日本底魚部会が、昭和53年２月９日から10日にかけて、北水研会議室（釧路市）で行われた。まず、飯塚企画連絡室長が開催水研を代表して挨拶を行い、つづいて本会議の世話役から会議開催までの経過報告がなされた。その後、各水研から最近の底魚研究の結果について発表があり、これについて質疑討論が行われた。

研究発表は次のとおりである。尚、これらの内容については、昭和52年度漁業資源会議北日本底魚部会報として53年３月、北水研より印刷発刊されている。

---------◇---------◇---------◇---------

伊藤　弘（日水研）：モロトゲアカエビの分布と生活史について

佐々木喬（遠洋研）：ギンダラ漁業とその問題点

竹内　勇、吉田久春（北水研）：カムチャッカ周辺のスケトウダラの食性について「'76年度用船調査」

加藤史彦（日水研）：タイ類の標識放流調査結果

山口閎常（遠洋研）：昭和51および52年の東部ベーリング海、大陸棚における商業船による底びき定点調査結果

尾形哲男（日水研）：日本海におけるスケトウダラの漁況と体長および年令組成

橋本良平（東北水研八戸）：東北海区スケトウダラの年令組成の変動について

北野　裕（北水研）：北海道周辺の底魚類許容漁獲量の推定方法について

---------◇---------◇---------◇---------

会議２日目は懇談会形式で、(1) 200カイリ水域内総合資源調査について、昨年より実施してきたこの事業の進展状況に関して、北海道ブロック（北水研)、東北ブロック（東北水研八戸支所)、日本海ブロック（日水研)、東海ブロック（遠洋水研)、さらに参加道水試の方々から夫々説明がなされた。そして、本事業の困難性にともなう業務の遅れとその原因等について見解が述

べられた。(2)次いで 200カイリ時代に突入したことによる漁業の変化、そしてそれらと研究上の諸問題、とくに魚価高が漁業や漁獲努力に大きな変化を与えつつあり、(1)との関連で、これからの調査研究上の問題が討議された。

ついで議事に入り、北水研金丸技官司会のもとに、(1)昭和53年度北日本底魚部会は日水研が当番であり、新潟と決定、開催時期については連絡をとりつつ決定する。また、課題についても後日関連水研と連絡をとりつつ日水研にまかせるということとなった。(2)今後の会報の印刷について論議された。

---------◇---------◇---------◇---------

以上のとおりであったが、参加機関は、日水研、東北水研八戸支所、遠洋水研、北水研の他に道内各水試と釧路市の水産課も参加し、40名となった。

海産〝マリモ〞？打揚げられる

（巻頭写真）

7月上旬に桂恋前浜を中心に阿寒湖の天然記念物マリモ(*Aegaglopila sauteri*)とそっくりの緑色球状の海藻の塊りが多数海岸に打揚げられたとして、地元の漁民が当所に持参してきた。翌朝、浜に出かけて、2、3個の海産〝マリモ〞を波打ち際で拾得することができた。漁民等の話では、数十個体位打揚げられたとのことであった。これは、緑藻類シホグサ族シホグサ科モツレグサ属のキタミモツレグサ(*Spongomorpha breviarticulata*)という体長数cmの綺麗な海藻で、桂恋付近の潮間帯に密生しているものである。岩から離脱したこの海藻が、多分水深2～3mの所のスリ鉢状の海底で、こういう球型になったのではないかということであり、たしかに球をくずしてみると新鮮なものであることから短期間に形成されたことが分かる。

27年前に近くの益浦海岸に1個打揚げた記録があるだけで、こんなに沢山打揚げられたことは珍らしいことである。（長谷川由雄）

北光丸の船籍港、釧路に移る

庁舎の移転は、昭和52年9月に完了したが、所属調査船北光丸は昭和53年4月1日に船籍港を小樽から釧路に移し、乗組員も桂恋の宿舎に入居を開始した。

5月22日、午前10時半より北光丸の移籍の挨拶をかねて、釧路市及び隣接管内の各関係団体を招待し、入舟岸壁の北光丸船上にて披露パーティが行われた。当日はあいにくの雨まじりの寒い日となったが、来賓は36名となり、船内見学後は船内にて分散パーティを行い、見学者と所員、船員等が夫々調査船としての性能や、調査水域、調査内容、今後の問題等について懇談し、盛会裡にパーティを終了した。

なお、探海丸は従来どおり小樽港を船籍港として行動する。

昭和53年度船舶運航計画

船名	53年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	54年 1月	2月	3月
北光丸	ドック 14(33)16	東北・道東 20(36)24 北上さんま生態調査		オホーツク 25(36)30 (特調費)(さけます幼魚調査)	太平洋オホーツク 21(20)9 さんま調査	9 25(21)15 (特調費 総合調査)		オホーツク 1(15)15 (特調費 総合調査)		南方沖合 20(22)10 さんま産卵生態調査		
探海丸	道東 18(13)30 (さけます幼魚)	道北オホーツク 6(20)25 (特調費)(さけます幼魚)	太平洋 5(20)24 いか	太平洋オホーツク 5(20)24 さんま	太平洋・オホーツク 30(11)9 (特調費)(いか)	22(25)15 いか	太平洋 26(20)15 さんま	ドック 1(30)30				

刊行物ニュース

（1977年以降）

(1)北海道区水産研究所研究報告，第42号　1977年3月

村田　守、石井　正：北海道・三陸太平洋海域に出現するアカイカとツメイカの生態に関する2・3の知見。

石井　正：日本の太平洋海域におけるアカイカ *Ommastrephes bartrami* の成長と年令に関する研究。

Kiyomitsu KITANO : Note on the water mass classification for the North Pacific Ocean used the oxygen and salinity diagram.

Kiyomitsu KITANO : Note on the properties of the cold eddies generated over the confluence zone.

Kiyomitsu KITANO : On the unusual oceanic conditions in the North Pacific Ocean.

中西　孝：貝類の心拍におよぼす環境の影響—Ⅰホタテガイの心拍数におよぼす水温・低塩分および低酸素の影響

(2)北海道区水産研究所研究報告，第43号　印刷中

北野　裕、依田　孝：西カムチャッカ沖のホッコクアカエビ資源とその開発過程

金丸信一、吉田久春：オッター・トロールの離底曳漁法による漁獲試験結果について

村田　守：スルメイカの体長・体重関係について

佐藤芳和：シルト・フェンスによる港内浚渫、埋立工事に伴う海水混濁防止効果

中西　孝：貝類の心拍におよぼす環境の影響—Ⅱエゾアワビの心拍数におよぼす水温・低塩分および低酸素の影響

Hiroshi ITO : Observations on the spawning of sea snails, two species of the genus *Baccinum*, *B. kinukatsugi*, *B. miyauchii*.

Yoshiaki SANBONSUGA : On the morphological characteristics of *Laminaria japonica* var. *japonica* studied by transplanting experiment. II. On the varieties of *L. japonica A.*

Yoshio HASEGAWA : Immediate problems facing Laminaria cultivation.

(3)1977年度　農林水産技術会議別枠研究　溯河性さけ・ますの大量培養技術の開発に関する総合研究　「河川型研究グループ」リポート　1978年2月

阿部進一、広井　修、他(道さけ・ますふ化場)：北海道沿岸における親魚の標識放流試験（根室海区納沙布岬よりの放流）

内藤政治、中山信之、他（釧路水試）：道東沿岸域におけるサケ幼稚魚期の環境条件

藤井　浄、阿部深雪（北水研）：オホーック海沿岸域の海洋構造

大槻知寛（網走水試）：網走沿岸海域の海況変動

小島伊織（網走水試）：網走沿岸定点の水温変化と流れの状況

鈴木梅二、近藤平八、他（稚内水試）：留萠・宗谷沿岸海域の環境とさけ幼魚の出現状況

藤井　浄、阿部深雪（北水研）：日本海北部（積丹半島以北）の海洋構造

道水産ふ化場：石狩川下流域の水質について

駒木　成（北水研）：サロマ湖における漁場環境の現状（素稿）

久保　正、佐藤芳和（北水研）：サロマ湖の物理的環境特性

白旗総一郎（北水研）：サロマ湖に対するシロザケ実験放流についての考察

箕田　嵩（北大水）：沿岸域におけるさけ・ます稚魚の食性と動物プランクトン—1、既往業績の評価と展望

黒倉　寿、平野礼次郎（東大農）：サケ・マス類精液の凍結保存に関する研究—希釈液について

山崎文雄、荒井克俊（北大水）：サケ・マス類の発生遺伝学的研究—特に胚発生の異常と遺伝子活性の関係について

能勢健嗣(淡水研)，矢野立志・江村利信（日大農獣医）：放流用シロザケ稚魚飼料の改善に関する研究—飼料中のタン白質および脂質レベルの成長におよぼす影響

白旗総一郎（淡水研）：さけ・ます移植の最小規模についての考察

(4)漁業資源研究会議・北日本底魚部会報（昭和52年度） 1978年3月

内容目次については本ニュース4頁に紹介

(5)日ソ漁委関係資料

北野　裕、吉田久春、金丸信一：カムチャッカ半島周辺の底魚資源について—東西カムのスケトウダラ資源。北水研、1977年2月。

北野　裕、吉田久春、金丸信一：カムチャッカ半島周辺の底魚資源について(2)西カムのコガネガレイ資源。北水研、1977年2月。

北野　裕、吉田久春、金丸信一：北海道・カムチャッカ半島周辺の底魚資源（その1)、カムチャッカ半島周辺のスケトウダラ資源。北水研、1977年3月。

北野　裕、吉田久春、金丸信一：北海道・カムチャッカ半島周辺の底魚資源（その3)、(4)西カムのコガネガレイの標識放流データ。北水研、1977年3月。

小林時正、入江隆彦、猪股　東、飯塚　篤、近藤平八：北西太平洋のニシンの資源状態に関する資料（1976)。北水研、1977年2月。

小林時正、猪股　東、入江隆彦、近藤平八：ニシンに関する統計資料（1976)。北水研、1977年2月。

猪股　東：北西太平洋ニシン刺し網漁場別漁獲統計資料（1976)。北水研、1977年3月。

入江隆彦：用船による1976年秋期オホーック索餌ニシン調査航海報告書。北水研、1977年３月。

北水研、他：遠洋底曳網漁業（北洋転換船）漁場別漁獲統計年報（1975年)。北水研、1977年２月。

(6)その他

北片正章、高　幸子：北方水域におけるサンマの生活についての一考察。第26回サンマ研究討論会議事録（昭和51年度)。 東北水研、1977年２月。

新谷久男、石井　正、村田　守：1975年太平洋イカ漁場一斉調査資料。北水研、1977年２月。

村田　守、新谷久男：スルメイカ冬生れ群資源の現状と問題点。日本海ブロック試験研究集録第１号、日水研、1977年６月。

金丸信一、吉田久春、金山　勉：但州丸乗船調査報告（1977年度用船調査)。 北水研、1977年12月。

土門　隆、千葉秀子：ズワイガニ調査報告書（1963年～1976年)、主として北緯53度以南のオホーック海水域のズワイガニ資源について。北水研、道ずわいがに漁協、1977年12月。

土門　隆、千葉秀子：北海道北東水域及び樺太東方水域におけるズワイガニ篭網漁業漁獲量漁場別統計（1963年～1976年)。 北水研、道ずわいがに漁協、1977年12月。

小林時正：ニシンの再生産に及ぼす流氷の影響について。漁業資源研究会議浮魚部会議事録、北水研、1977年３月。

三本菅善昭、鳥居茂樹：マコンブの産地による形態的特徴と養殖品種の選定ー北海道周辺のコンブ類と最近の増養殖学的研究。日本藻類学会、1977年11月。

村田　守：スルメイカの体長、体重関係について。昭和52年度イカ類資源・漁海況検討会議事録、東北水研八戸支所、1978年５月。

北水研日誌

12・6　場所長会議出席のため長谷川所長東京都へ出張、８日まで。

12・8　庶務課長会議出席のため山本課長東京都へ出張、10日まで。

1・25　道立函館水試田中室蘭分場長、北海道漁業共済連村上常務外２名来所。

1・25　開発局営繕部中田営繕監督室長外２名事務打合せのため来所。

1・30　企画連絡室長会議出席のため飯塚企連室長東京都へ出張、２月２日まで。

1・31　官房総務課管理班阿部係長事務打合せのため来所。

2・5　所長会議、場所長会議出席のため長谷川所長東京都へ出張、10日まで。

2・7　資源海洋部長会議出席のため新谷・駒木両部長東京都へ出張、11日まで。

2・7　北海道開発局中谷技官道開発事業について打合せのため来所。

2・8　北海道水産部伊藤振興課長海洋牧場問題について打合せのため来所。

2・14　増殖部長会議出席のため白旗部長東京都へ出張、18日まで。

2・23　海洋生物環境研究所深瀧副所長来所。

2・27　釧路市経済懇話会開催、於北水研約20名参集（釧路市経済部担当）

3・1　共済組合氏家事務官外１名事務打合せのため来所、２日まで。

3・7　栽培センター所長、釧路水試佐々木科長海藻研究打合せのため来所。

3・11　北海道食糧事務所松羅厚生課長事務打合せのため来所。

3・13　共済支部運営委員会出席及び事務打合せのため山本課長札幌、小樽へ出張、17日まで。

3・21　船長会議及び事務打合せのため津田、加賀両船長東京都へ出張、25日まで。

3・23　鹿部栽培総合センター表谷総務課長外２名、釧路水試原庶務係長外１名養殖施設視察及び事務打合せのため来所。

3・25　カナダ政府漁業環境省水産増養殖局ロン・ジネッツ、オットー・ラップ、アル・リル３氏来所。

3・27　各省直轄研究所長連絡協議会出席のため長谷川所長東京都へ出張、29日まで。

4・3　北光丸第１次航海(定けい港変更に伴う回港)出港、５日釧路港入港。

4・5　稚内水試武藤総務課長外２名来所。

4・5　電力中央研究所龍野理事、海生研岩井次長来所。

4・6　日本冷凍協会天野会長（前東海区水産研究所長）来所。

4・6　庶務課長会議出席のため村本課長東京都へ出張、８日まで。

4・7　東海区水研三輪部長、十勝支庁水沼水産課長来所。

4・15　北光丸第２次航海（第１種中間検査及び機関部分割検査並びに一般工事、於塩釜市、東北造船ＫＫ）出港、５月17日まで。

4・18　探海丸第１次航海（日本海北部海洋調査）出港、藤井主任研究官乗船、30日まで。

4・19　所長会議出席のため長谷川所長東京都へ出張、

23日まで。

4・25　漁海況情報サービスセンター岡田常務海洋、増殖関係打合せのため来所。

5・8　探海丸第2次航海（日本海北部及びオホーツク海南西部海洋調査並びにサケマス幼魚分布調査）出港、藤井主任研究官、小林技官乗船、25日まで。

5・10　ブリティシュコロンビア大学サンドラC・リンドストーロ嬢来所。

5・12　ニュージーランドJ・S・キャンブル氏来所。

5・15　北海道電力火発部田辺次長外1名火力発電業務打合せのため来所。

5・15　企画連絡室長会議出席のため飯塚企連室長東京都へ出張、18日まで。

5・17　浜屋水産KK糸井業務部長来所。

5・19　物品検査のため官房総務課加藤係長外2名来所、20日まで。

5・19　釧路市環境部佐熊次長、道教育大（釧路）伊藤教授来所。

5・22　北光丸の公開披露、於入舟町岸壁北光丸船上。

5・24　200カイリ水域内漁業資源調査の研究チーム検討会開催、於釧路商工会館、長谷川所長外担当官出席。

5・25　水産庁松浦海洋漁業部長来所。

5・25　200カイリ水域内漁業資源調査の北海道ブロック検討会開催、於北水研、水産庁森川研究課長来所、長谷川所長外担当官出席、26日まで。

5・26　米国大使館広報文化局久保陽氏来所。

5・28　場所長会議出席のため長谷川所長東京都へ出張、30日まで。

5・29　釧路市東部漁業協同組合阿部和男氏来所。

6・5　探海丸第3次航海（太平洋イカ類第1次漁場一斉調査及びサケマス幼魚調査）出港、大迫室長、村田技官乗船、24日まで。

6・6　道水産部藤野水産課長、中央水試大久保副場長事務打合せのため来所。

6・6　北光丸第3次航海（第1次太平洋サンマ調査並びに桂恋沖定線調査）出港、和田技官、東北水研原技官乗船、14日まで。

6・8　水産庁研究課小川係長、森川事務官事務打合せのため来所、10日まで。

6・16　森水産庁長官来所。

6・16　大蔵省理財局酒井課長補佐外1名、道財務局佐久間係長、釧路財務部斉係長来所。

6・22　昭和53年度第1回地方連絡会議出席のため長谷川所長札幌市へ出張、24日まで。

6・26　北光丸第4次航海(オホーックさけます調査)出港、7月30日まで。

6・27　漁業共済基金山口常務監査役外来所。

6・30　海上保安庁警備救難部田口補佐官、釧路海保富田部長外2名来所。　（阿部記）

人　事　異　動

昭和53年1月1日付

（遠洋水研主任研究官）　農林技官　大迫　正尚
命　北水研資源第三研究室長

昭和53年2月1日付

（余市分室）　農林技官　米沢千鶴子
復職を承認する

（余市分室）　農林技官　福原　英司
休職を承認する

昭和53年4月1日付

（余市分室）　農林事務官　津田　リヨ
辞職を承認する

（余市分室）　農林技官　小林　時正
（余市分室）　農林技官　入江　隆彦
北水研余市分室勤務を免ずる

（北水研庶務課長）　農林事務官　山本　昭
命　水産大学校庶務課長

（北陸農試会計課長補佐）農林事務官　村本　久
命　北水研庶務課長

（北水研探海丸二航士）　農林技官　本間　登
命　東北水研わかたか丸一等航海士

（水産庁船舶予備員）　農林技官　折笠　基
命　北水研探海丸二等航海士

（北水研探海丸操舵手）　農林技官　松田　勇
命　水産庁船舶予備員

（水産庁照洋丸甲板員）　農林技官　末吉　真敏
命　北水研探海丸甲板員

昭和53年4月10日付

（北水研北光丸司厨員）　農林技官　小田　好弘
命　水産庁東光丸司厨員

（水大校耕洋丸司厨員）　雇　萬田　信男
命　北水研北光丸司厨員

（北水研北光丸甲板員）　農林技官　古川　修悟
命　水産庁昭洋丸甲板員

（水産庁開洋丸甲板員）　農林技官　川崎喜利夫
命　北水研北光丸甲板員

昭和53年5月1日付

（東海水研企画連絡室）　農林技官　横山　雅仁
命　北水研増殖部勤務

編　集　後　記

昭和53～54年度の新編集委員が選出されたのでここに紹介します。竹内　勇（海洋部)、和田時夫（資源部)、横山雅仁（増殖部)、増田英治(庶務課)、飯塚　篤（企連室、委員長）の5名です。